慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アメリカ西漸運動
Sub Title	The westward movement
Author	中村, 勝己
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1970
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.63, No.3 (1970. 3) ,p.267(49)- 270(52)
JaLC DOI	10.14991/001.19700301-0049
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19700301-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(7) 水島・都道府県別生命表より得られる LSR 推計の推計結果は，純流出と純流入との差を無視すれば，すなわち両者の平均を作れば，ほぼ CSR 推計の結果に一致するとみてよい。

(8) 全国合計の段階で，国際移動を無視すれば純流出≡純流入が成立しなければならないという無矛盾性の要請からすれば，LSR 法よりは CSR 法の方が便宜，かつ有用である。

*　　*　　*

以上はすべて純移動人口，あるいは人数にもとづいて導かれたものである。期首人口に対する比率——つまり移動率の次元による考察が加わらねばならない。次稿の課題である。そのほか，第3次報告以下に残された諸点を列挙すれば，つぎのとおりである。作業の進行とともに順次報告の機会を持ちたいと考える。

(1) 「住民登録人口移動報告」との関連では，移動率のディメンションでの比較，および41年以降の住登純移動人口の推移を考察しなければならない。

(2) これは就調移動人口（43年）との対応をつける意味でも欠かせない。「就業構造基本調査」そのものについては，13地域間のフロム・ツー・マトリクス，つまり地域流動表の作成が急がれる。

(3) CSR 推計と LSR 推計との比較については，若干の典型府県——たとえば，東京，大阪のような流入地域，岩手，熊本，長野，新潟のような流出地域，さらに南関東，北海道のような転換地域等に，もっと詳細かつ直接的な推計をおこなうことが望ましい。

最後に，以上から CSR 前進法によって，大正9年以降昭和15年に至る20年間の純移動人口推計が比較的成功裡におこなえる見込が強くなった。周知のとおりこの時期については，関連の傍証資料が乏しいので，CSR推計だけではその妥当性に疑問の余地が少なくないのだが，以上戦後期にかんする検討から，大勢としてはほぼ妥当との印象を得た。なお戦前，戦後比較の作業としては現在，5年，25年国調の本籍地（または出生地）・現住地別人口表の分析が進行中であることを，付記しておく。

研究ノート

アメリカ西漸運動

中村勝己

1

「アメリカ史における辺境の意義」[1]を初めてF・J・ターナーがとりあげて以来既に四分の三世紀を閲するが，この間のターナー説 "The Turner Thesis" をめぐる論争は，優に一つの研究史を形成する程である。[2] ターナー説は元来アダムズ（H. B. Adams）らの「ゲルマン起原説」[3]の国民主義的表現であり，ゲルマンの森ならぬ西部の自由な土地に民主主義の起原を求めようと

注（1） Turner, F. J., The Significance of Frontier in American History. (in *The Frontier in American History*. N. Y., 1920); The Rise of Middle West, 1819-1829. (*The American Nation: A Series*, Vol. XIV.) 中屋健一「アメリカ史研究入門」（創元社刊）第2章「フロンティア学説とその批判」，高木八尺「米国政治史の研究」（岩波書店刊）第3章「米国政治史に於ける土地の意義」，高村象平「アメリカのフロンティア」（「人文」第3号，のち高村象平「経済史随想」塙書房刊，所収），高村象平「ホームステッド法制定前」（「三田学会雑誌」第40巻第7・8・9合併号）

（2） ターナーにはじまる「フロンティア学説」「ターナー学説」の研究史の回顧と展望については，さしあたり Gressley, G. M., "The Turner Thesis—A Problem in Historiography" (*Agricultural History*, Vol. XXXII, No. 4. Oct., 1958. pp. 227-249; Simler, Norman J., "The Safety-Valve Doctrine Re-Evaluated" (*Agricultural History*, Vol. XXXII, No. 4. Oct., 1958, pp. 250-257. 田島恵児「アメリカ西部における土地投機の歴史的意義」（「青山経済論集」第11巻第2・3合併号，岡田泰男「アメリカ公有地史研究の動向」（「社会経済史学」第30巻第2号），同「アメリカ公有地と資本主義」（「三田学会雑誌」第58巻第5号），同「アメリカ公有地史研究の史料について」（三田学会雑誌」第61巻第6号），同「アメリカ西部公有地処分の実態」（「三田学会雑誌」第62巻第3号）；公有地政策史に関する諸研究，たとえば Treat, Payson Jackson, The National Land System, 1785-1820. N. Y., 1910; Hibbard, Benjamin Horace, A History of the Public Land Policies, N.Y., 1924; Robbins, Roy M., Our Landed Heritage: The Public Domain, 1776-1936. Princeton, 1942; および公有地政策研究の集大成たる Gates, Paul Wallace, History of Public Land Law Development. Washington, D. C., 1968. や西漸運動についての最も包括的研究 Billington, Ray Allen, Westward Expansion: A History of the American Frontier. 2nd ed., N.Y., 1964. などは何れも多かれ少かれターナーの伝統に立っている。詳細には，Gates および Billington の巻末の Bibliography を参照せよ。

（3） Adams, H. B., "The Germanic Origins of New England Towns." (Johns Hopkins University, *Studies in History and Political Science*, Vol. I, No. 2.) Baltimore 1882, pp. 5～38; "Village Community of Cape Ann and Salem." (Johns Hopkins University, *Studies in History and Political Science*, Vol. I, No. IX-X) Baltimore, 1883. pp. 3-81.

（4） Ostrander, Gilman M., "Turner and the Germ Theory." (*Agricultural History*, Vol. XXXII, No. 4. Oct., 1958. pp. 258-261.); Gressley, Gene M., "The Turner Thesis" Agricultural History, Vol. XXXII, No. 4, pp. 227-249. Curti, Merle, "The Section and the Frontier in American History: The Methodological Concepts of Frederick Jackson Turner." (Stuart A. Rice, ed., Methods in Social Science. Chicago, 1931. pp. 353-367); ムードの2論文 Mood, Fulmer, "Turner's Formative Period." (Early Writings of Frederick Jackson Turner. Madison, 1938. pp. 3-39); Do., "The Development of Frederick Jackson Turner as a Historical Thinker." (*Proceedings*

するものであった。[4] ターナー説は追随者達によって過度に強調され，「ターナー学派」となった。[5] 土地問題という視点からターナー学派のフロンティア学説を見れば，その論点は次の二点に要約出来よう。即ち，第一に，西部の自由な土地は自由独立の農民層を広汎に創出し，アメリカ民主主義揺籃の地となった。第二に，西部の土地へ移住したのは東部の賃銀労働者であった。以上の二点から，西部辺境は，東部に於ける社会の固定化・劣悪な賃銀・政治的自由の束縛に対し，個人主義・社会的上昇の自由・経済的平等の世界であり，東部における階級対立の激化と社会革命発生に対する「安全弁 safety-valve」であった，というのである。

2

この「ターナー学派」およびこれに対する批判は次の諸点をあきらかにしたといえよう。

第1に，ある批判者は，アメリカの民主主義の発展にとって最も主要な役割を演じた要因として，「辺境」とならんで，他の諸要因——たとえば，土地投機業者，従軍兵士，民主的教育制度，工業化・都市化による社会の流動性など——も考慮さるべきであるとし，さらに他の批判者は，「辺境」の意義自体を否定し，1830年又は南北戦争以後のアメリカの発展の推進力は東部の経済的利害である，とした。しかし，この「東部の経済的利害」をどのように理解するかについては批判者の間で必ずしも一致をみていない。例えばindustrial capitalism (M. Curti), industrialism (B. Stolberg), urban-industrial environment (J. D. Hicks), a great age of great enterprise (J. Dorfman), workingmen (A. M. Schlinger) といったように，歴史的段階により，また，同一段階についてもその理解はさまざまである。[6]

第2に，ターナーの「辺境」概念は極めて不明確であり，歴史的段階や，地域により，「辺境」のもつ意義は異なっていることを明らかにしていない。

第3に，西漸運動における土地投機の意義が考慮されていない。西漸運動ないし公有地払下げの歴史における土地投機の意義について，ターナーの「アメリカ史における辺境の意義」の書評においてアルヴォードはいち早くターナーの土地投機業者の役割についての無智を指摘し，[7] ついでアバーネシーも南部における土地投機の存在を指摘している。[8] さらにドナルドスン，[9] トリートや，[10] ヒバート，[11] サコルスキー，[12] ロビンズ，[13] およびカーステンセン編「公有地」[14] などの公有地政策史の研究，シェーファーの「ウィスコンシン・ドゥームズデイ・ブック」の精密な諸研究，[15] ゲイツのイリノイ・セントラル鉄道会社の土地政策の研究および土地投機に関する輝かしい一連の著書・論文，[16] シャノンのホームステッド法および安全弁説の研究，[17] ビリントンの大著「西漸運動」，[18] ボーグの投機業者の利潤についての一連の諸研究，[19] ニュー「エラスタス・コーニング。商人・金融業者」[20] にいたる多くの研究は，[21] 西部の公有地の払下げおよび西漸運動において，土地投機が到底無視する事が出来ぬ程大きな意義をもっていた事を明確にした。これらの諸研究によって明らかになったことは次のようである。公有地は直接移住者に払下げられるよりは，介在する土地会社・土地投機業者によって買占められた。買占地はある期間寝かせた後，最小限度の改良を施し，払下げ価格の何倍もの高い地価で売却された。彼らはまず劣等地から分譲し始め，優等地は最後まで保留した。彼らが介在し，定住者への土地分譲から不労所得を多く得れば得る程，農民の土地購入費は高くなり，農場への投下資本はくいつぶされたから，西部の経済発展は妨げられ，遅れることになった。

第4に，西漸運動には波があり，不況と人口移動とは関連している。コールの公有地売却額と景気変動と

---

of the Colonial Society of Massachusetts. XXXIV, 1943, pp. 281-352.) は残念ながら参照出来なかった。Mood, Fulmer, "The Historiographic Setting of Turner's Frontier Essay." (*Agricultural History*, Vol. XVII, No. 1, Jan., 1943; "The Concept of the Frontier, 1871-1898." (*Agricultural History*, Vol. XIX, No. 1, Jan., 1945, pp. 24-30; "Notes on the History of the Word Frontier." (*Agricultural History*, Vol. XXII, No. 2, April, 1948. pp. 78-83); Frend, Rudolf, "Turner's Theory of Social Evolution." (*Agricultural History*, Vol. XIX, No. 2, April, 1945. pp. 78-87); Benson, Lee, "Historical Background of Turner's Frontier Essay." (*Agricultural History*, Vol. XXV, No. 2, April, 1951. pp. 59-82) および，中村勝己「アメリカ資本主義の成立」，第2編第2章，86 ページ以下参照。

(5) 前注(4)のほか中屋健一「アメリカ史研究入門」，第2章「フロンティア学説とその批判」。

(6) Gressley, op. cit., pp. 231-249: なお H. David, Harold U. Faulkner, Louis M. Hacker, Curtis P. Nettels and Fred A. Shannon (eds.) The Economic History of the United States. 9 vols. N.Y., Vols. III, IV, V, VI の各巻をも参照。

(7) Alvord, Clarence W., "Review of Frederick J. Turner's Frontier in American History" (*Mississippi Valley Historical Review*, Vol. VII. No. 4, March, 1921. pp. 403-407.

(8) Abernethy, Thomas P., Frontier to Plantation. Chapel Hill, 1932. p. 362; Western Lands and the American Revolution. N.Y., 1937. p. 367; Three Virginia Frontiers. Baton Rouge, 1940; "Democracy and the Southern Frontier." (*Journal of Southern History*, Vol. IV, Feb. 1938. pp. 3-13).

(9) Donaldson, Thomas. The Public Domain: Its History. Washington, D.C., 1884.

(10) Treat, Payson Jackson, The National Land System: 1785-1820. N. Y., 1910. passim. 特に chaps. V, XIV.

(11) Hibbard, Benjamin Horace, A History of Public Land Policies. N. Y., 1924.

(13) Sakolski, A. M., The Great American Land Bubble: The Amazing Story of Land-Grabbing, Speculations, and Boom from Colonial Days to the Present Time. N. Y. and London, 1932, Johnson rep. ed., N. Y., 1966.

(13) Robbins, Roy M., Our Landed Heritage: The Public Domain, 1776-1936. Princeton, N. J., 1942, Bison Book edition, Lincoln, Nebraska. 1962.

(14) Carstensen, Vernon, (ed.) The Public Lands: Studies in the History of the Public Domain. Madison, 1963. 所収の諸論文。

(15) Schafer, Joseph, Wisconsin Domesday Book, Town Studies, Vol. I, Madison, 1924; Wisconsin Domesday Book, General Studies, Vol. II, Four Wisconsin Countries, Prairie and Forest. Madison, 1927; Wisconsin Domesday Book. General Studies, Vol. III. The Wisconsin Lead Region. Madison, 1932; Wisconsin Domesday Book, General Studies, Vol. IV. Winnebago Horicon Basin. Madison, 1937; The Social History of American Agriculture. N. Y., 1936; その他多数の論文を発表している。安全弁説に関連した論文には，"Some Facts Bearing on the Safety-Valve Theory." *Wisconsin Magazine of History, Vol. XX, Dec.* 1936. *pp.* 216-232. "Concerning the Frontier as a Safety-Valve", (*Political Science Quarterly*, Vol. CII, Sept., 1937. pp. 407-420; "Was the West a Safety-Valve for Labor?" (*Mississippi Valley Historical Review*, Vol. XXIV, No. 3, Dec., 1937. pp. 299-314 がある。シェーファーの著作目録は State Historical Society of Wisconsin, Joseph Schafer; Student of Agriculture. Madison, 1942. および，田島恵児「アメリカ西部における土地投機の歴史的意義」(「青山経済論集」第 11 巻第 2・3 合併号)

(16) Gates, P. W., "Research in the History of American Land Tenure" (*Agricultural History*, Vol. XXVIII, No. 3, July, 1954, pp. 121-126; "Land Policy and Prairie State." (*Journal of Economic History*, Vol. II, No. 1, May, 1941, pp. 60-82); "The Rôle of the Land Speculator in Western Development." (*Pennsylvania Magazine of History and Biography*, Vol. LXVI, No. 3, July 1942, pp. 314-333.); "Frontier Estate Builders and Farm Laborers." (Walker D. Wyman and Clifton B. Kroeber, eds., The Frontier in Perspective. Madison, 1957. pp. 143-163); The Illinois Central Railroad and Its Colonization Work. (*Harvard Economic Studies*, Vol. XLII. Cambridge, Mass., 1934; Fifty Million Acres: Conflicts over Kansas Land Policy, 1854-1890. Ithaca, 1854. Frontier Landlords and Pioneer Tenants, Ithaca, 1945. (もと *Journal of the Illinois State Historical Society*, Vol. XXXVIII, June, 1945. pp. 143-206 に収載されていたものである。)

(17) Shannon, Fred, "The Homestead Act and the Labor Surplus" (*American Historical Review*, Vol. XLI, No. 4, July, 1936, pp. 637-651); "A Post Mortem on the Labor-Safety-Valve Theory" (*Agricultural History*, Vol. XIX, No. 1, Jan. 1945. pp. 31-37.)

(18) Billington, Ray Allen, Westward Expansion: A History of the American Frontier. N. Y., 1949, revised ed., 1960.

(19) Bogue, A. G., "The Iowa Claim Club: Symbol and Substance." (*Mississippi Valley Historical Review*, Vol. XLV, No. 2, Sep. 1958, pp. 231-253); Bogue, A. G. and M. A., "Profits and the Frontier Land Speculator." (*Journal of Economic History*, Vol. XVII, No. 1, March, 1957, pp. 1-24); Bogue, A. G., Money at Interest: The Farm Mortgage on the Middle Border. Ithaca, 1955.

(20) Neu, Irene D., Erastus Corning: Merchant and Financier, 1794-1872. Ithaca, 1960.

(21) 上掲書のほか，夥しい個別研究があるが，これらについては，Billington, Westward Expansion 巻末の文献解題および *Journal of Economic History* の Recent Publications を参照。

の関連についての研究[22]によれば，連邦政府土地局の公有地売却代金収納額は卸売物価の動向と一致し，1819年，1837年，1857年の大きな不況の直前において頂点に達し，不況期には激減しているのは，土地投機業者が介在したからである。そこで，次に，不況期には移住者の移動があったにも拘らず，連邦政府土地局の公有地売却代金にはそれが反映しないのは何故かという問題[23]が解かれねばならない。

第5に，西部は東部の賃銀労働者に対する安全弁ではなく，寧ろ東部農民[24]に対するそれであり，

第6に，西部への移住は相当の費用を要するが故に，東部で経済的に没落したような無資力な入植者にとって西部は決して自由であったとはいえない[25]，という諸点であろう。

第7に，西部はアメリカ資本主義の構造にどのような意義をもっていたか。南部の奴隷所有者達が西部を奴隷州として支配したならば，南部はこの西部と連合して連邦議会および政府を制圧し，北部産業資本を孤立させたであろう。南部・西部連合勢力が連邦を支配すれば，依然として西部公有地を奴隷所有者および土地投機業者に払下げるような土地政策が採られたであろう。しかし公有地政策史は，西部の土地が次第に現実入植者に有利な方式で払下げられるようになったことを示している。現実入植農民および小市民が土地投機業者に収奪されることなく自由かつ廉価に土地を獲得出来れば出来るほど，資本主義の発展は広くかつ深いわけである。

第8に，農民が自由かつ廉価に土地を入手出来れば出来るほど，資本主義は広くかつ深い国内市場の上に立つことになる。そしてこれは，資本主義の構造的特質にかかわるものである。

注(22) Walter Buckingham Smith and Arthur Harrison Cole, Fluctuation in American Business, 1790-1860. Cambridge, Mass., 1935. pp. 44-58, 81-84; Cole, "Cyclical and Sectional Variations in the Sale of Public Land, 1816-1860. は前掲 "Fluctuations" 所収論文を部分的に書きあらためたものである。Gates, History of Public Land Law Development, p. 496.

(23) Kane, Murray, "Some Considerations on the Safety Valve. Doctrine" (*Mississippi Valley Historical Review*, Vol. XXIII, No. 2, Sep. 1936. pp. 168-188. 不況期にミシガン州の人口は増大し，マサチュセッツ州の工業の雇用の減少が見られる。工場労働者の一部は帰農し，辺境の自由地へは移民しなかった，というのである。

(24) Carter, Goodrich and Sol Davison, "The Wage-Earner in the Westward Movement." (*Political Science Quarterly*, Vol. L. June, 1935, pp. 161-185, Vol. LI, March, 1936, pp. 61-116; シェーファーの批判に対する反批判。Goodrich and Davison, "The Frontier as a Safety Valve—A Rejoinder" (*Political Science Quarterly*, Vol. LIII, No. 2, June, 1938, pp. 268-271; Danhof, Clarence, H., "Farm-Making Costs and the Safety Valve, 1850-1860." (*Journal of Political Economy*, Vol. XLIX, No. 2, June, 1941, pp. 317-359.) (この論文は，Carstensen (ed.) *op. cit.*, pp. 253-296 に収録されている); "Economic Validity of the Safety Valve Doctrine." (*Journal of Economic History*, Supplement, 1941, pp. 96-106; Ellen von Nardroff, "The American Frontier as a Safety Valve—the Life, Death, Reincarnation and Justification of a Theory." (*Agricultural History*, Vol. XXXVI, No. 3, July, 1962. pp. 123-142.)

(25) 前注(23)参照。第1に，西漸運動がアメリカ資本主義発達の諸段階にもつ意義を夫々あきらかにする必要がある。次に西漸運動にはさまざまな型があり，北部型と南部型は区別さるべきである。第3に，西部への移住にはさまざまな形態があり，グードリッチおよびデヴィスンが想定したようなロード・アイランドから長駆カンザスへ，しかも大集団で移住するような例は決して一般的ではない。むしろ比較的近距離の既知の開拓予定地へ，家族の一部が単身又は家族毎に移住している例がしばしば見られる。又グードリッチらは移住に当って必要資財をすべて新規に購入したものとして計算し，土地も購入するものとしている。しかし，土地購入に当っては，公有地 (1820 年迄) でも，土地会社などの売出地でも年賦支払いが見られたし，農村店舗主による生活資料の前貸も見受けられた。これらの諸事情を考慮すれば，グードリッチおよびデヴィスンによる移住費の計算は，もっと内輪になされて然るべきだったと考えられる。移住者のなかには農民ばかりではなく，招かれた手工業者や商人なども含まれていた事も考慮されるべきである。

極大利潤追求の終焉と新しい企業目標

——ガルブレイスの「新しい産業国家」における売上高最大成長率説のひとつの解釈——

小 嶋 光 昭

〔I〕 ガルブレイスの「新しい産業国家」と売上高最大成長率

JOHN KENNETH GALBRAITH は，その著「新しい産業国家 (THE NEW INDUSTRIAL STATE)」の中で、中小の企業の存在を認めつつも，現代アメリカ資本主義に代表されるような「ゆたかな社会 (THE AFFLUENT SOCIETY)」においては，経済の中枢部あるいは産業社会の主流は，技術が動態的に進歩し，大規模の資本を擁し，高度に組織化された少数の大法人企業であると論じている。これは、一般的な用語に従えば，所謂，寡占体制であるが，ガルブレイスは，それを「大企業体制 (the Industrial System)」と定義し，この大企業体制が「新しい産業国家」の主要な特徴であると論じている。

先進的技術，これに伴い必要となる人間や工程の専門化，ならびにその結果生ずる長期の時間と巨大な資本の固定化で特徴づけられる「大企業体制」の下では，高度且つ巨大な経営活動を行なう大企業は，一方で技術開発，原料の供給、労働力特に高度の専門技術知識を持つ労働力の供給を確保し，他方で充分な需要を常に確保しなくてはならない。しかし，需給均衡の市場メカニズムの下では，これらは常に保証されるとは限らない。従って，大企業は，その存立と成長のためには，もはや市場メカニズムに依存することはできなくなり，これら供給と需要を企業自から計画化する必要が生ずる。だが，この計画化は，個々の企業が単独で行なうには余りにも経営上の危険が大きく，個々の企業の能力を超えることになる。ガルブレイスは，『これに対する一つの解決策は国家に主要な危険を負担させること』であり，高度技術の要請が企業をして国家の援助や保護を必要とさせると論じている。この国家の援助や保護は，技能資格を持つ人的能力の供給＝教育，先進的技術の開発，総需要の統御などという形態でなされる。この場合，計画化の主体は，国家ではなく，あくまでも産業であり，産業が国家をも計画化の中に組み入れてしまうという意味で「産業国家」なのである。

それでは「新しい産業国家」あるいは「大企業体制」における支配力の持ち手は誰か。ガルブレイスによれば，それは，高度な技術に関する専門的知識及び情報を握り，集団によるデシジョン・メーキングに参与する人々あるいはこれらの人々が形成する組織，即ち「テクノストラクチュアー (the Technostructure)」である。

支配力は，自然的あるいは人為的稀少性のゆえに入手が最も困難で且つ代替の困難な生産要素、即ち，限界的供給が最も非弾力的な生産要素に帰属する。伝統的には，この支配力が帰属した生産要素は資本であり，支配力は資本家が握っていたと信じられている。そして，この経済上の支配力を基礎に資本家が国家をも支配する。この資本支配の典型が所謂国家独占資本主義の段階であると言えよう。しかし，ガルブレイスの「大企業体制」あるいは「成熟企業 (the mature corporation)」においては，資本は豊富であり且つ大企業が多額の内部留保をすることができ，他方，「組織化された知性」は非代替的であり相対的に稀少になるため，支配力は，資本家から，専門的技術知識と組織的情報を独占的に保有し且つ自主性が要請されるテクノストラクチュアーに不可避的に移行し，そして，資本家に代って産業を支配するテクノストラクチュアーは政治・行政社会をも支配するに到る。このように，高度な技術水準を背景とする「新しい産業国家」では，計画化の主体は産業であり，支配力はテクノストラクチュアーが握るのであって，ガルブレイスの認識では，